



N.S.ニュース速報A

NSDAP/AO : PO Box 6414

Lincoln NE 68506 USA

www.nsdapao.org

#1157

18.05.2025 (136)

戦争中のヒトラー 何が起こったのか？

A.V.シャーフェンベルク 著

パート4

第3章

ラインハルト・ハイドリヒ

「最も偉大な者の献身とは、リスクと危険に遭遇し、死を賭けてサイコロを振ることである」。

フリードリヒ・ニーチェ
『ツァラトゥストラはこう語った』 第二部「自己克服について

ドイツが第二次世界大戦に敗れたのは、開戦前だけでなく、ヒトラーが首相に選出される2年前の1931年、彼がまだ権力争いに明け暮れていた頃であった。その年、落ちぶれた石鹼工場の経営者だったハンス＝ティロ・シュミットは、当時信号隊のチーフだった兄のルドルフを通じて、ドイツ

陸軍のチフリエシュテレ（サイファール局）でわずかな地位を確保した。チフリエシュテレの暗号技術者たちは、10年近くにわたる集中的な労働の末、それまで発明された暗号化装置のはるか先を行く暗号機を完成させていた。エニグマとして知られるこの暗号機は、ドイツ軍の命令の機密を、それを読もうとする外部からのあらゆる試みから守るものであった。

11月、シュミットはベルギーのヴェルヴィエにあるグランドホテルに行った。そこで彼はエニグマの秘密の仕組みを漏らした機密書類をフランスの秘密工作員に1万マルク（現在の貨幣価値で約3万ドル）で引き渡した。「シュミットの裏切りのおかげで」、サイモン・シンは暗号解読の歴史の中で、「連合国がドイツ軍のエニグマ機の正確なレプリカを作ることが可能になった」（146）と書いている。その暗号化されたメッセージを最終的に解読する作戦は、英国諜報部員によって「ウルトラの秘密」と呼ばれた。現金のために祖国を裏切った非政治的な裏切り者のおかげで、世界は終わりを迎えることになった。しかし、ウルトラでさえも連合国の戦争に勝つには十分ではなかった。特に海上では、ドイツ海軍の暗号は依然として解読不可能だった。しかし1943年初頭、英国は暗号の一部が残っているUボートを拿捕した。アブヴェール（ドイツ軍情報部）の裏切り者が残りを提供し、以後、潜水艦作戦は突然崩壊した。イギリス海軍とアメリカ海軍の駆逐艦の艦長たちは、すべてのドイツ潜水艦の所在を把握し、容赦なく深海砲火を浴びせた。

第二次世界大戦の重大な転換点に至る出来事は、第三帝国内部で、あまり知られていない二人の人物の間で起きていた秘密闘争から始まった：ヴィルヘルム・カナリスとラインハルト・ハイドリヒである。皮肉なことに、二人は旧知の仲だった。親衛隊保安部（SD）のリーダーであったハイドリヒは、1920年代に海軍でカナリスの下で働いた経験があり、かつての上司は1935年にアブヴェール長官にまで上り詰めた。翌年、ハイドリヒはゲシュタポ（*Geheime Staatspolizei*、国家秘密警察、FBIやロンドン警視庁に相当）のトップに就任した。彼の任務はスパイや裏切り者を摘発し、敵国でのスパイ活動を推進することだった。これらの任務は通常、軍事問題を厳密に扱う非政治組織であるはずのアブヴェールの権限に属するものだった。しかし、S.D.は、あらゆる手段を使って国家社会主義を破壊しようとするイデオロギー的な敵対者（国内外を問わず）に対抗するために必要だった。ハイドリヒはこれらの見えない敵を倒す天才であることを証明し、ウルトラを機能させる重要な情報をイングランドに提供するスパイや

裏切り者を迅速に追跡することで、秘密情報技術の有効性を無効にすることができた。

彼は攻撃的な秘密工作でも成功を収めた。ミケルソンによれば、「間違いなく、全戦争で最も壮大なクーデター」であったハイドリヒは、説得力のある偽情報の巧みな展開によってスターリンのパラノイアを巧みに操り、マーシャルは赤軍最高司令部を殺害することでこれに応えた。ソビエト連邦の専門的な軍事指導者たちの全面的な喪失は、1940年の小国フィンランドによる屈辱的な後退、そして翌年のロシアにおける枢軸軍の連綿と続く成功という形で現れた。

1941年9月27日、ハイドリヒはチェコ領の保護官に任命された。彼は、公式には、その厄介で生産性の低い土地に秩序をもたらすために任命されたが、秘密裏に、主に国防軍内部で活動していると疑われるスパイ組織を追い詰めるために任命された。ハイドリヒは、チェコ人を中世以来支配してきた封建的なスラブ王国から脱却させ、近代ヨーロッパ共同体の一員とすることを目標に掲げた。彼の計画は1942年初頭までに急速に進展し、チェコ人は占領されたすべての国民の中で最も生産的で親ライヒ的な国民となった。ハイドリヒの成功は、チェコの政治を理想的な国家社会主義国家にしようとする彼の決意にあった。そこでは、国民はもはや自分たちが取るに足らない小国に属しているのではなく、価値ある、統一大陸の貢献する一員であると感じていた。彼らは、自分たちをチェコ人というよりも、ドイツ人だけでなく、フランス人、スカンジナビア人、ハンガリー人、スペイン人などとともに、共通の存在のために闘っているヨーロッパ人だと考えようになった。

ハイドリヒは、片手でチェコ保護領を強化する一方で、もう片方の手で帝国の地下敵国の反逆とスパイ活動を根絶やしにした。ハイドリヒはイギリス軍情報部にとって悲惨な結果となったスパイを次々と拘束し、彼らの追跡を続けていた。しかし1942年2月、ハイドリヒは衝撃的な発見をする：ドイツ防諜局の諜報員パウル・トゥーエンメルが連合国のためにスパイ活動をしていたのだ。ハイドリヒはトゥーエンメルを処分する代わりに釈放し、尾行させた。この裏切り者は、国防総省の調査官をアブヴェールの最高レベル、おそらくはハイドリヒの旧友ヴィルヘルム・カナリスにまで導いていた。

ハイドリヒは知らなかったが、カナリスは国家社会主義に深い憎悪を抱いており、彼がすでにドイツに与えた恐るべき、さらには決定的なダ

メージは大きかった。たとえば、1940年夏、カナリスは第三帝国の軍事情報部のリーダーとして、ヴィシー・フランス、次いでスペインとの協力の道を外交的に切り開くよう命じられた。総統は彼らの協力が非常に重要であると考え、直接彼らに訴えたかったのだ。前年6月、ドイツと戦争を始めたシャルル・ドゴールらがイギリスに逃げ込んでフランスを窮地に陥れたのに対し、彼は敗戦国の側に残った。

ヒトラーは会談のタイミングを見計らった。7月3日、イギリス海軍の艦船は、北アフリカの港、アルジェリアのオランとメルス・エル・ケビールに平和的に停泊していたフランス艦隊に対して、いわれのない奇襲攻撃を開始した。6日には、HMS空母アーク・ロイヤルの爆撃機がフランス戦艦ダンケルクを撃沈しようとしたが撃退された。その2日後、HMSエルメスからの爆撃機がダカールのフランス旗艦リシュリユーを攻撃し、再び撃退された。9月末（23日から25日まで）、チャーチルは西アフリカのフランス海軍を掌握しようとした。ダカールの守備隊を掌握しようとしたところ、フランス軍は激しく抵抗し、2隻のイギリス戦艦（HMSバーハムとレゾリュション）を大破させ、チャーチルの侵攻作戦は失敗に終わった。

これらの勝利は、ドイツ国防軍に敗北したフランスの自尊心を回復させ、イギリス、特にイギリス海軍の士気に深刻な打撃を与えた。かつての戦友に対するイギリスの侵略が始まった最初の2日間で、1,297人のフランス人水兵が死亡し、さらに多くの水兵が灼熱の油海域でひどいやけどを負い、艦船は沈没するか大破した。チャーチルは、わずか2カ月前の同盟国への空襲は、ドイツに船を奪われるのを防ぐためだったと主張した。しかし、ヒトラーはフランス海軍にはまったく興味がなかった。パンツァー用として蓄えていた貴重な石油を、高価で脆弱な軍艦のために浪費するつもりはなかったのだ。

その結果、総統は特別条項のもとで、フランス船をフランス人水兵だけで乗船させ、武装させることを許可した。言い換えれば、総統は自分自身にとっても、他の誰にとっても、フランス船を盗むことは不可能にしたのである。チャーチルはこのことを世界中の人々と同様に知っていた。というのも、この合意は地球上のすべての主要新聞に一面トップ記事として掲載されたからである。連合国はヒトラーを信用できない嘘つきとして描き続けたが、1940年6月20日にヴォルフスブルヒト司令部で開かれた海軍の秘密会議は、ヒトラーが自分の言ったことを信じていたことを証明している。レーダー大提督は、フランスの高等艦隊に関して、「総統閣下は、フ

ランスの名誉に影響を及ぼすようないかなる措置も講じないことを望んでおられる」と報告した。

チャーチルがこの卑怯な作戦を命じた本当の動機は、1940年の作戦中にフランス軍を裏切り、その敗北を確実なものにしたにもかかわらず、卑劣なナチスと休戦協定を結んだフランスに復讐するためだった（下記参照）。チャーチルには他にも侵略の動機があった。連合国寄りの『マーシャル・キャベンディッシュ第二次世界大戦図説百科事典』は、「単刀直入に言えば、チャーチルはイギリスの国内世論と国際世論を喚起するために、低コストで強大な打撃を与えたかったのだ」と認めている。彼が『第二次世界大戦』の中で書いているように、『多くの人が見限り、見放したこのイギリスが、見知らぬ人たちが、彼女に立ちはだかる強大な力に降伏の瀬戸際で震えていると思い込んでいたこのイギリスが、昨日までの親愛なる友人を無慈悲に打ちのめし、しばらくの間、議論の余地のない海の支配権を自らに確保したのである』（中略、イギリス海軍部隊はフランスの守備隊に撃退された）」（第1巻、229）。

同じ情報源(226, 227)によれば、チャーチルが「昨日の親愛なる友人」に対する軍事行動を英海軍司令官のノースとサマーヴィルに提案したとき、彼らは「ぞっとし、驚愕した」という。それから20年以上経った（1962年）後も、ジョン・H・D・カニンガム元帥（退役）は、チャーチルが驚いた同盟国を武力で裏切ったという記憶そのものを、「ぞっとするほど恥ずべきこと、ぞっとするほど愚かなこと」（229）と憤慨している。中立国だけでなく、わずか8週間前の旧同盟国に対して全面戦争を仕掛けたチャーチルは、第一級の正真正銘の戦争犯罪を犯したのである。彼の卑劣な攻撃の翌日、フランスはイギリスとの国交を断絶し、報復としてジブラルタルに爆撃機を空襲させた。チャーチルは宣戦布告から手を引いた。宣戦布告をすれば、ヒトラーは総統の望むもの、つまりフランスとの軍事同盟を手に入れることになるからだ。

二枚舌のイギリスに対する憎悪がフランスでこれほど高まったことはなく、ヒトラーはペタンに対英同盟を要請することで、民衆の感情を利用しようとした。最近の出来事に鑑み、マーシャルはこれに応じざるを得ないと考えたため、独仏協力の見通しは良好だった。フランコ將軍はこの戦いに飛び込むことをさらに望んでいた。フランコ將軍は、スペイン内戦でドイツが勝利をもたらしたように、帝国の危機を救うことができると喜んだ。しかし、総統がペタンやフランコと会談して同盟関係を確認する前

に、カナリスは個人的に、一人の老兵が戦友に語るように、ドイツは戦争に負ける運命にあること、両政治家は自国を愛しているのであれば、ヒトラーとのいかなる取引にも決して同意すべきではないことを、極秘に告げた。そのような知らせを聞いて、彼らは驚いたが、ドイツ軍情報機関のトップ以外からの情報であったため、当時ヒトラーがあらゆる戦線で連綿と成功を収めていたにもかかわらず、彼を信じる気になった。

というのも、フランコは恩人のカナリスの個人的な旧友であり、彼の執務室には総統ではなくスペイン総統の大きな写真が飾られていたからである。ヒトラーがペタンを訪ねたとき、マーシャルは友好的な態度を崩さなかったが、協力の提案はすべて拒否した。ペタンの態度は一変していた。ヒトラーは対イギリス支援のためにフランス艦隊の再建を申し出たが、この前代未聞の寛大ささえもペタンを動かさなかった。それから1年後の7月初旬、チャーチルはかつての同盟国に対する好戦的な態度を崩さず、中立国シリアへの強力な侵攻を開始した。フランスの防衛軍は圧倒されたが、イギリス軍に約2500人の死傷者を出すまでには至らなかった。このような侵略行為--フランス領土の占領、テロ攻撃による数千人のフランス市民の殺害、高い死者数を伴うフランス船の沈没--は、元帥がイギリスに宣戦布告するには十分すぎる根拠だった。しかし、カナリスは、将来に対する深刻な疑念、つまり、正しい決断を下すことを妨げる不確実性で彼の心を蝕んでいた。

ジブラルタルを占領すれば、地中海、そして必然的に北アフリカでの勝利が確実視されていた。フランコはジブラルタルを占領すれば、地中海と必然的に北アフリカでの勝利が約束されるはずだった。総統はドイツ、イタリア、フランス、スペインの同盟を結び、イギリスを地中海から追い出すことを望んでいた。カナリスによる外交的妨害工作がなければ、間違いなくそのような同盟が結ばれ、戦争の流れは枢軸国に有利に根本的に変わっていただろう。しかし、彼の外交妨害工作はフランスやスペインにとどまらなかった。貴重な石油埋蔵量を持つブルガリアにも同様に枢軸国への参加を思いとどませようとしたが、1941年3月1日にボリス国王が同国を帝国と同盟させたことで失敗に終わった。カナリスは卑怯な復讐として、2年後に国王を毒殺した。

カナリスは、自国民に対して影で陰謀をめぐらす他の放蕩貴族と同様、「家庭で快適で文化的な生活を維持するための資金に事欠くことはなかった」（マンヴェル、41）--第一次世界大戦後の最も暗い時代、貧しいドイ

ツ人が何百万人も飢えていた時でさえも。ルール地方の実業家の息子であった彼は、受け継いだ富の地位を他のどんなことよりも維持しようと決心していた。彼の国家社会主義に対する憎悪を理解できるだけでなく、裏切り者仲間とは一線を画すもう一つの要因があったかもしれない。カナリスはおそらくユダヤ人だった。親しい友人たちの間では「小さなレバノン人」（マンヴェル、39）と謎めいた呼ばれ方をしていたが、彼の祖先はドイツではなく、イタリア・ルネサンス以来、ユダヤ人が盛んな商人社会を営んでいたロンバルディアにルーツを持っていた。未確認の報告（Britton, 26）には、脚注で「ヴィルヘルム・カナリス」は実際にはモーゼス・マイヤベアー生まれであったと記されている。マンヴェルとフレンケルは、カナリスが「（偽の書類を使って）シモン大佐やブロッホ大佐のようなユダヤ人をアブヴェールに引き入れることさえできた」（140）と説明し、彼が非アーリア人である可能性を強調している。ユダヤ人が自らの軍事情報部を牛耳っていたのでは、ヒトラーが戦争に勝つことはほとんど期待できなかっただろう。

1942年春までに、ハイドリヒはカナリス（あるいはマイヤベアーか）を第三帝国で最も危険な裏切り者として認識し始めていた。**SD**将校のヴァルター・シェレンベルクによると、ハイドリヒは「カナリスが西方攻撃の日付を裏切ったことは事実であると確信していたが、それでもまだカナリスを告発したくはなかった。彼は待って、もっと証拠を集めようとした。彼に眠らされてはいけない』とハイドリヒは私に警告した。しかし、カナリスが体制に与えたすべての損害に対して処罰される日が来るであろう」（Schellenberg, 405-6）。事実、カナリスはドイツがフランスに進攻していることを英国に知らせただけでなく、ソ連への攻撃が迫っていることを二度も警告していた（Manvell, 150）。

カナリスはドイツ国防軍の忠実なメンバーの間で、ようやく慎重になってきた。ヴィルヘルム・カイテル陸軍元帥は、「軍事情報部の責任者として自分の義務だと考えていた絶え間ない警告のために、彼を叱責さえしていた」（Manvell and Fraenkel, 150）。そして、ハイドリヒはアブヴェールの裏切り者に迫り始めていた。「私は今初めて、カナリスの内面に疲弊の兆しがあることに気づいた」とシェレンベルクは回想している。「彼は絶え間ない内輪もめに疲れ切っていた。ハイドリヒのここ数ヶ月の氷のように冷たい戦術が効果を表し始めていた。彼は不安と落ち着きのなさを感じており、ハイドリヒに対する身体的恐怖のようなものを感じているのだと

私は思った」（シェレンベルク、406）。シェレンベルクの印象は、カナリスの初期の伝記作者も同じであった。この外套を着た提督は、「ハイドリヒを『獣の中で最も賢い』と呼んだこともあるハイドリヒを、率直に死ぬほど恐れていた。どんなに困難な状況であっても、ヒトラーに対しては緊張した様子を見せなかったが、ハイドリヒからの電話には一日中気が気でなかった」（Abshagen, 202）。

パニックに陥ったカナリスは、ハイドリヒをすぐに排除しなければ、数週間後にはドイツ国内のすべての連絡先を失うことになるかと英国に伝えた。正々堂々と戦えば、ドイツ軍は常に勝利し、最終的に勝利するまで勝ち続けるだろう。連合国が生き残るための唯一の希望はスパイ活動だった。ハイドリヒのチェコ・ショーケースも同様に、強引なドイツ陸軍貴族が指揮を執る占領地すべてでの実行が最終的に検討されていた。ミケルソンによれば、ハイドリヒは「フランス、そしておそらくは全領土の非効率的で腐敗した陸軍行政に取って代わることを期待していた」。モスクワとロンドンの連合国指導者たちは恐れをなした。もしハイドリヒとSSが全領土を占領し、数千万のフランス人、ベルギー人、オランダ人、デンマーク人、ノルウェー人、ポーランド人、スラブ人、ウクライナ人、白系ロシア人の効果的な協力を得て、スーパーSS国家に団結したらどうなるだろうか？戦争は負けるかもしれない！ハイドリヒは第三帝国で最も危険な人物であり、何としても排除しなければならない。

事態の深刻さに危機感を募らせたチャーチルは、チェコから亡命してきた暗殺者をプラハ近郊にパラシュートで降下させるよう命じた。5月27日の朝、彼らはハイドリヒが乗っていた無防備なオープンカーを攻撃した。手榴弾は走行板上で爆発し、ハイドリヒは致命傷を負った。ハイドリヒは数日間苦しんだ後、1942年6月4日午前4時30分に息を引き取った。ロンメルが殺害された後、ロンメルのアフリカ軍団はエル・アラメインで大敗し、そのわずか数週間後、第6軍の22個師団、33万人がスターリングラードで包囲された。どちらの場合も、チャーチルとスターリンは、ドイツ軍が戦場に出る前にその戦闘計画を知っていた。

ハイドリヒの死によって到達した転機を、海上の戦争ほど端的に表したものはないだろう：ハイドリヒが暗殺された瞬間、ドイツの潜水艦作戦は絶好調となり、Uボートによる史上最多の190隻の連合軍艦船が撃沈された。その翌月から、その成功は減少していった。彼が殺されるまでは枢軸

国が勝利していたが、その後着実に負け始めたのは偶然ではない。

ハイドリヒはカナリスを逮捕し、ユダヤ人だらけのアブヴェールを閉鎖し、参謀本部のすべての陰謀家にとって致命的な結末を迎えるまで、おそらくあと数日しかなかった。しかし、彼が暗殺された後、ゲシュタポの捜査官たちは、「赤いオーケストラ」 (*Die rote Kapelle*) と呼ばれるドイツ国内のより差し迫ったスパイ組織に横取りされた。共産主義者のユダヤ人で、戦後イスラエルに移住したレオポルド・トレッパが設立し、運営していた。トレッパの裏切り者たちは、アブヴェールや参謀本部の裏切り者たちと同様、アメリカ人ユダヤ人女性や「貧しいプロイセン貴族」 (マンヴェル、166) を含む上流階級の道楽者たちだった。この扇動的な有象無象は、自分たちの間でも「共産主義貴族」と呼ばれ、下品なナチスとは一線を画すために、ソ連流マルクス主義との知的流行の戯れを楽しんでいた。

トレッパの援助 (10,000マルク、移動式印刷機、いくつかの無線送信機) を得て、それでも彼らは「諜報活動と政治宣伝のための組織を設立し、ナチスの戦争マシーンをかなりの程度脅かした」 (Manvell, 166)。レッド・オーケストラは、ドイツ空軍参謀本部、外国放送監視局、さらにはドイツ政府自体にまで諜報員を配置した。トレッパのレッド・オーケストラは最終的にゲシュタポと国防総省によって一掃されたが、その追跡と撲滅はアブヴェールと陸軍の注意をそらした。

一方、防諜捜査官は、ドイツ軍情報部が裏切り者の巣窟であるとは信じられなかった。ハイドリヒ暗殺後の数年間、カナリスはドイツで最も致命的な癌としての役割を再開したが、1944年7月20日のヒトラー暗殺未遂事件でその正体が暴かれた。その8ヵ月後、「小さなレバノン人」は絞首台で裸で死んだ。遅すぎた！その時まで、彼と参謀本部の仲間の裏切り者たちは、連合国側に戦争に勝つために必要なものをすべて供給していた。ヒトラーは、数で勝る相手と戦う盲目のボクサーのようなものだった。

ミケルソンが書いているように、「ロンドンとモスクワの連合国指導者たちは、何が危機に瀕しているかを正確に知っていた。ラインハルト・ハイドリヒ親衛隊上級大将を殺害したことで、第三帝国は圧倒的な数の連合軍の挟み撃ちにあい、粉碎されることが確実となった。



NSDAP/AOは世界最大です 国家社会主義プロパガンダサプライヤー！

多くの言語での印刷物およびオンライン定期刊行物

多くの言語の何百冊もの本

多くの言語の何百ものウェブサイト

